

ことばの^{ちから}力

「あいさつ」というと、ふっと思い出す一人のおばあさんの^{すがた}姿があります。

わたしはぶらぶら^{さんぽ}散歩するのが好きで、その日によって、あの道^{みち}からこの道^{みち}へ

と、コース^かを変えて^{たの}楽しめますが、わたしの家^{いえ}から十五分^{じゅうごふん}くらいのところの

道端^{みちばた}の家の門^{うちもん}に、午後^{ごご}、おばあさん^たが立っていました。いつもなのです。あ

まり人の通^{ひととお}らない狭^{せま}い道路^{どうろ}で、わたしが通^{とお}りかかると、おばあさんは、にこ

にこなさいました。わたしも、なんとなく、^{かる}軽く^{あたま}頭^さを下^{とお}げて通^すり過ぎまし
た。

そんなことが、ひと^{つきちか}月^{つづ}近く続^ひいたのでしょうか、ある日、そのおばあさんが
な^し亡^なくなられたことを知りました。

そうだったのか、とわたしは思いました。おばあさんは、門^{もん}のところに立^たっ
て、世^よの中^{なか}へ「さようなら」を告^つげていらしたのだ。あの世^よへ旅^{たびだ}立つ前^{まえ}に。

おばあさんの、その「あいさつ」は、知^しらない人^{ひと}たちへも、無^{むごん}言^つのうちに告
げられていたのだと思います。そればかりでなく、おばあさんは、木^きにも鳥^{とり}に
^{いえ}家の屋根^{やね}にも、^{そら}空^{くも}にも雲^{かぜ}にも風^{かぜ}にさえも、「さようなら」を告^つげていらし
たのではないのでしょうか。

わたしは、その門^{もん}の前^{まえ}を通^{とお}ると、よく、そのおばあさんの^{すがた}姿^{おも}を思^だい出し、

あ^{ころ}の頃、ただ儀礼的に軽く^{ぎれいてき}頭^{かる}を下げただけの私^{あたま}が、なんとなく恥^はずかしく
なります。正^{しょうじき}直^{じき}にいうとわたしは、そのことをわずらわしく^{かん}感じて、散歩^{さんぽ}の
コース^かを変^かえたことさえありました。

ですから、「あいさつ」のことばをめぐって、えらそうなことを述^のべる資^{しかく}格
はないのかもしれませんが。しかし、どうやら言^いえることは、「あいさつ」とい
うのは、その根^ねもと^ねのところは、ことばづかいより、その人^{ひと}の気^き持^もち^もの持^もち方^{かた}
だ
ということです。

他人^{たにん}ということばがあります。ずい分^{ぶん}冷^{つめ}たいひびきのあることばです。他^{ほか}
の人^{ひと}という意^い味^みであるにすぎないはずなのに、なにか、「人^{ひと}を見^みたら泥^{どろ}棒^{ぼう}と思^{おも}
え」というような、人^{ひと}を敵^{てき}視^しする気^き持^もち^もの構^{かま}え^{かん}を感じ^{かな}て悲^{かな}しくなります。

(川崎洋『ことばの力 しゃべる・聞く・伝える』より)